View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Prefectural University of Hiroshima Repository

人間と科学　県立広島大学保健福祉学部誌　11 (1)　1 − 11　2011

［総　説］

ソーシャルワークの新たなパラダイム

A new paradigm of social work practice

加茂　陽

人間福祉学科

抄　録

筆者の不勉強のためであろうか，近年，国内外で，特に国内において，数多くのソーシャルワークと銘打った著作が出版されているにもかかわらず，理論構成や実践の方向性を指し示す研究や実践報告はますます少なくなり，ソーシャルワーク研究は隘路に迷い込んでいる印象を受ける。厳密性に欠ける理論や変容力が低い実践が共有される世界に内閉的に閉じこもる限り，一定の自己充足が可能である。しかし，その場合，訴えられる問題に対しての高度に洗練された解決の実践が断念されることになる。社会生活場面で生じる問題解決，つまりソーシャルワーク実践のためには，まずは，この内閉的世界からの離脱が不可欠である。その上で，自由な立場から基礎理論および実践理論の構築に着手することが求められる。本論においては，この問題意識の下，社会構成主義的コミュニケイション理論を基礎理論とする新たな支援のパラダイムの概略を示した。

キーワード：ソーシャルワーク，新たなパラダイム，社会構成主義，コミュニケイション理論

Ⅰ　本論の概略

国内のみならず，北米においても，問題解決力を有するソーシャルワークモデル構築作業が閉塞状況下にある[1)]。慧眼な読者が内外の一連のソーシャルワークの文献をひも解くならば，支援方法を説明する概念群が実践の地平へと浮上することができず，それゆえ変容力を発揮することなく，単なる文字列として文献群の中に沈殿している事態を目にすることになるであろう。以下の小論においては，この事態を突破し，体系だった社会（ソーシャル）の変容論を構成する手法を提示し，その概略を描き出してみたい[2)]。社会構成主義的視点からのコミュニケイション理論を土台にして[3)]，新たなソーシャルワークモデルの概略が描写される。最初に，モデルの基礎理論が略述され，次に問題解決法を軸として基礎理論の臨床化が試みられる。

Ⅱ　基礎的概念について

1-1 「訴え」とは

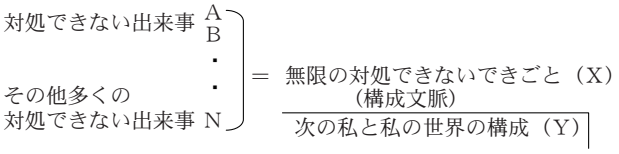
伝統的なソーシャルワークモデルにおいては，説明の洗練度に違いがあっても，ソーシャルワーカーが関与するクライアントの「訴え」に対して，次の様な解決のパラダイムが用いられてきた。それは，「訴え」は実在する問題を反映する記述であるという，認識論的，存在論的前提に依拠した上で，問題が実在するがゆえ，その原因を探索し，その原因を除去するというパラダイムであった。しかしながら，何らかの原因によって作り出された問題というような，病理現象の究極の原因の存在を前提とする直線的因果関係による説明方法は日常会話の中では通用しても，過度に単純化された状況の説明手法であり，状況の厳密な説明力を有していない。さらに，その現象が人の意識に反映され，訴えられるという問題の反映論は一層曖昧な説明方法である。この様な伝統的なソーシャルワークの，問題およびその原因の実在論，そして問題の反映論に依拠する変容実践論は過度に曖昧であるが故，新たな問題解決のパラダイムが提示されなければならない。客観的な問題とそれが意識へ反映され，訴えとなるという説明手法を否定するならば，そもそも「訴え」とは何かという「訴え」についての考察が求められることになる。しからば「訴え」とは何か。まず，「訴え」を定義してみる。

1-2　ストーリーとしての「訴え」

「訴え」は，トランズアクションの過程において，クライアントである私によって，私の統制を超えた事象として構成され，語られることで自己増殖する，始原的対象の否定的構成体である。また，それは，「どうしてこうなったのかわからない」，「どうして良いか解らない」などと，説明力を超えた実態として，雄弁に説明される逆説的な構成体である。言い換えると，「訴え」は実体的対象を客観的に反映した記述ではなく，主体的に構成される一つの「ストーリー」である[4)]。

1-3　肥大化した訴え

肥大化した訴えは，私と私の世界とを構成する文脈となる。以下図 1 を見よ。

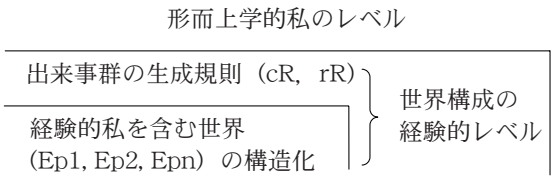


A＋B＋・・・・・＋Nが私と私の世界の構成文脈となる。
X/Y の表記はXがY生成の文脈として生起する
という意味である[5)]。

図 1　世界構成の文脈としての訴え

2-1 「私」とは

「私」は次の二重性を有する。「私」はある行為の主体であり，世界内の経験的な主体である。「私」は世界内に現れてくる行為主体である自分自身のことを，あるいは同じく行為主体である他者のことを対象として語ることができる。しからばそれら経験的主体を描く「私」はいずこに存するのか。それは対象化不可能で，経験内容の中には現れることはない。この「私」は，言語行為を通して操作の客体である経験的世界の背後にある世界構成の主体であると教え込まれることで，実在味を帯びた「私」であり，それは経験的世界に属さない，形而上学的な主体である。図 2 を見よ。比喩的に言うならば，この「私」は風をおこし，あるいは視覚的な構成を示す扇の要素を束ねる，経験的世界には属さない「要」の役割を担う。未だ意味が流動的な始原的世界の意味構成が，「私」によって構成された私の世界という強い確信を与えられるためには，経験的次元から離脱した地点から，「私」の製作物として



cR はconstitutive ruleつまり意味の構成規則であり，rR はregulative rule行為の選択規則である[6)]。それらは言語行為の意味構成，及びそれの選択の先行的力として作用する。

図 2　形而上学的私と経験的世界構成

理にかなう形で構成し，それを他者に向けて語る超越的存在の作業が不可欠である。それなくしては，あらゆる経験レベルの「私」の説明や行動は拡散し宙を漂い，世界は漂流し，その結果構造化された世界は産出されることはない。形而上学的，超越的「私」を世界構成の主体と見なすことで，経験的レベルの始原的対象を「私」の世界として筋道を立てて構造化し，語ることが可能となる。経験的世界を構造化するために考案されたのが構成主体としての「私」である。経験的な世界を作り出すために，実在証明にかからない「私」を考案することは，人々の優れた知恵の行使である。

2-2　伝統的自己決定論の誤り

それゆえ，この形而上学的私の存在を論理的，経験的に証明することは不可能である。この私は論理的，経験的世界外の私であるがゆえ，神の子であることを，あるいは神から受け継いだ理性的能力という経験的事実を根拠として，私の決定の正当性を根拠付けることはできない。多くのソーシャルワーカーが共有しているこれまでの，神や理性を根拠としたバイステックの自己決定論の論拠[7]は誤りである。

3　始原的事象

伝達されたメッセージの意味は，受け手の構成規則を文脈とする意味構成作業によって初めて現実化する。つまり，トランズアクションの場面において流布しているが，構成される以前のメッセージはトランズアクションの主体によって構成を待つ始原的事象である。また，この意味の顕在化は主体たちの構成規則を文脈として，多様に展開する。この意味生成論は，メッセージあるいはそれらの集合は客観的意味を有し，その意味は人の意識に反映されるという，意識の反映論とは正反対の世界の説明法である。

4-1 「ひと」としての対象，「もの」としての対象

訴えられる対象は明確に区分される「ひと」と「もの」から成り立ってはいない。過剰なペダンティックな臭いがするかもしれないが，たとえばサルトルの有名な『嘔吐』の主人公の訴えを取り上げてみよう[8]。「私は公園でマロニエの根を見て吐き気がした」。この訴えはおそらく慢性胃炎あるいは胃潰瘍という身体疾患についての，つまり「もの」の訴えである。それは同時に人間関係とそれを支える「ひと」化されている「もの」的世界の無根拠さへの根源的不安の訴えでもある。この訴える主人公には恐らく胃薬が，重症の場合は手術が有効であるだろう。しかし，哲学的あるいは宗教的処方も治癒力を有する。採用する説明のパラダイムで訴えの治癒方法も異なる。このようにトランズアクションの場面では，人の訴えの対象を「もの」と「ひと」とに二分することは不可能で，「もの」への支援，「ひと」への支援という支援の二分法も同様に不可能である。

4-2　支援場面における「ひと」と「もの」

通常伝統的ソーシャルワークにおいては，支援場面において「もの」の欠如は資源の不足として語られる。さらに，資源はニーズと結びつく概念であり，資源が不十分である事態は，ニーズが満たされない事態として語られ，それは不適応に類型化される。彼（彼女）らに取って，このニーズと資源は適応，不適応を説明するキー概念である。それらの関係は次のような単純な図式で説明される。

表 1　資源の十全さ，ニーズの充足，不充足，適応レベル

資源の十全さ	ニーズの充足，不充足	適応レベル
資源が十分	ニーズが満たされる	適応
資源が不十分	ニーズが満たされない	不適応

生活苦で育児が困難で，かつ虐待が疑われる母親がクライアントであると想定して見よう。

ここでの問題解決は上記のような，「彼女は子育てのニーズが満たされていないがゆえ，保育所を（資源）を斡旋すれば，彼女は育児に困らず適応的な子育てを実践できる」という，きわめて単純な「資源，ニーズ充足，適応実現パラダイム」では不可能である。

比喩的に述べるならば，ソーシャルワーカーはニーズを満たすべく進行方向（資源獲得の方向）を定める信号機ではない。 むしろ初心者ドライバーであるクライアントの運転技術を向上させる，助手席のベテランドライバーである。 確かに青は進めの信号であるが，進み方を知らずしては交差点を渡ることはできない。重要なのはむしろドライヴィングの知識である。ここでドライヴィングの知識が意味するのはトランズアクション場面での行為選択や他者の行為の意味構成，そしてそれらのルールについての知識である。この点がこの小論において最も強調したい点である。

問題解決のためには，Descriptive Circular Questions（DCQ）によって，例えば「子どもの睡眠時間があるので夜は何とかなるが，日中が一番きつい」などと，彼女が拡散した問題定義を先ず差異化し，その記述の後，問題の解決法（ここでは保育園入所）を考案し，解決されると想定される内容を実践することが不可欠である。ソーシャルワーカーは彼女が考案した保育所入所で何が解決されるのかを彼女に問うだろう。無論「昼間楽になる」は表層的な問題解決であり，彼女には問題解決力を有する新たな子どもへの行為選択（action : a）や子どもの行為への意味構成（meaning construction : m）をリフレクトする機会が作られる。子どもが在宅する時間帯に彼女なりの新たな育児の方法を見出すための質問（Reflexive Circular Questions :

RCQ）[9] をソーシャルワーカーは試みるであろう。ここでの問題の解決とは何か。それは，DSQ によって彼女が子どもとの間のトランズアクション過程での問題を訴え，記述し，差異化して，さらに RCQ で記述内容をリフレックスし，実践する中で，彼女が新たな行為選択法（a）や, 子どもの行為への意味づけ法（m）を獲得することである。

5　トランズアクションとは

トランズアクションとは，実践を通して行為（アクション）の主体たちが循環的に, 行為選択法（reglative rule : rR）や行為の意味付け法（constitutive rule : cR）を差異化し，新しく（つまりトランズ）生成し , それらの規則を文脈に新たに（すなわちトランズ）行為と意味構成を試みる重層的過程である。

6　差異化

トランズアクション過程において流通するのはメッセージである。伝えられたメッセージは受け手によって何らかの差異化として受け止められ，受け手の構成文脈に基づき, 新たな意味として構成される。その際, 受け手の構成文脈も差異化される。この意味構成は次のメッセージ伝達行為に連動し，そのメッセージは差異として最初の伝達者に伝達され，最初の伝達者はこの差異をさらに具体的差異として構成する。それゆえトランズアクションは差異が還流する過程といえよう。この差異をキー概念としたトランズアクション過程の分析はベイトソンのエコロジカルなマインド理論に依拠している（Bateson,G）[10]。システムの力動性を説明する際，あるメッセージは意味を伝達し，それが受け手によって受容されるという意味のキャッチボールモデルは採用されない。

7　循環的とは

ここで言う循環的とは循環的因果関係のことである。通常人は問題を生起させる原因という直線的因果関係の枠組みで，生成の力学を説明する。しかしながら，問題はこの直線的因果関係の力学によって発生するのではない。状況の説明は，循環的因果関係という認識の範疇を用い，始原的事象，ここでは問題として意味づけられた対象，の力動性に向けられなければならない。本論では説明のため循環的因果論の範疇を採用する。その理由は以下のように単純である。二者関係を取り出してみると, 作用因としての私 A（原因）は, 対象 B を変容させることができる（結果）。これは直線的因果関係の範疇を用いた現象の記述である。ところが，B の変容は，A を変容させる力として作動する。つまり，B は原因である。集団の循環的な力動性を説明し，変容を試みるためには，直線的因果論よりも，このような循環的因果論の枠組みを用いることで説明力が上がり，変容力が向上するからである。ここで採用する因果範疇は以下である。

つまり，採用する因果の範疇は,

A（原因）$\longrightarrow$ B（結果）という直線的因果範疇ではなく,

A（原因）$\rightleftarrows$ B（結果）の循環的因果範疇である。

前者の直線的因果範疇を用いるならば，変容点は A（原因）のみである。これに対して，後者の範疇では A と B のいずれもが変容点となり，後者の範疇で評定を試みる方が，はるかに多くの介入点を明らかにすることができる。

8-1 「訴え」の構成要素

それは生活場面での出来事を構成要素とする，クライアントである「私」の構成体である。

訴えの構造を図 3 のように図示することができる。Ep は episode，つまりできごとであり，KEp は Kernel episodes の略，中核的出来事群である。

8-2　中核的構成要素 (KEp)

中核的構成要素とは Ep1（主体 A と B とのトランズアクション・シークエンス），および Ep2（主体 B と C とのトランズアクション・シークエンス），Ep3（主体 A と C とのトランズアクション・シークエンス）のそれぞれの繰り返し，つまりパターン化の過程より

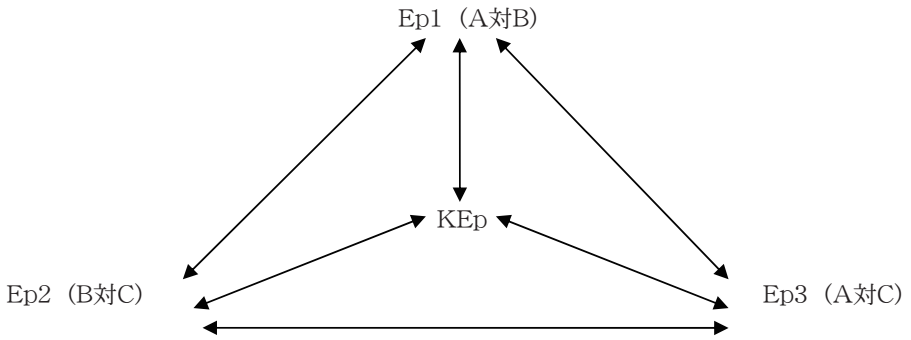


図 3　訴えの構造

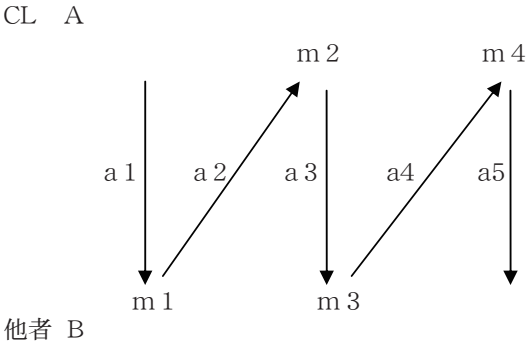


図 4　出来事の構造

生じた，各サブシステムの行為と行為の意味づけの規則が結びついたシステムである。つまりそれはパンクチュエイションの規則（Punctuation :P）[11]，出来事定義規則（Definition of Episode : DEp）および関係性定義規則（ Definition of Relationship : DR）からなる対象を意味づける規則 cR と自らの行為を選択する規則 rR の体系である。

つまり，

Ep1　A と B とのトランズアクション過程で生じる
　① A の cR および rR
　② B の cR および rR

Ep2　B と C とのトランズアクション過程で生じる
　① B の cR および rR,
　② C の cR および rR

Ep 3　A と C とのトランズアクション過程で生じる
　① A の cR および rR
　② C の cR および rR

のそれぞれは相互に結びつき, 規則のシステム群（つまり中核的構成要素）を構成し，このシステムは逆にサブシステムである出来事を産出する文脈となる。

8-3 「出来事」Ep とは

「出来事」は，中核的要素を文脈として，クライアント（私）によって問題場面として時系列を軸にしてパンクチュエイトされた，行為（a）と意味づけ（m）を要素とするトランズアクショナルな集合体である。

9 「訴え」ストーリーの再生産力学

トランズアクション過程を通して，出来事群の構造体である中核的構成要素（KEp：cR 及び rR）を文脈として，人（私）は出来事を産出し，それら産出された「出来事」は「私」の中核的構成要素（KEp）を補強するというように，「出来事」は経験的私の世界内で自らを再生産する力学を有する。

また，この再生産力学は以下の図 5 のように示される。

そしてこのシークエンスはパターン化, 構造化され, A，B それぞれに cR と rR とを生み出す。

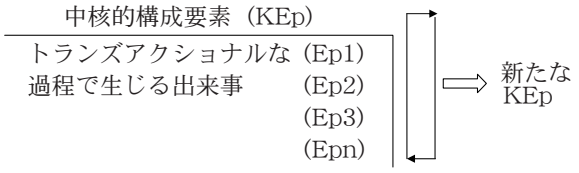


図 5　訴え生成の力学

10 「パンクチュエイション」

ワッツラウィックらが説明するように，日常生活場面において「出来事」が「出来事」として顕在化するためには，トランズアクションの連鎖がひと固まりの系列として区切られ（パンクチエイトされ），取り出されなければならない。言い換えるならば現実とは区切られて出現し，実在化する現実であり，トランズアクションの主体たちはそれぞれ固有の区切り方の文脈を有する。たとえば，上記図 4 のトランズアクションに対して，超越的主体である CL「私」A は他者の行為に対しての被害的意味づけ規則（m），それへの対抗的行為選択規則（a），そして順序付けからなる構成規則に従って，a2 から切り取りを開始し，他方 B は B 固有の構成規則を文脈にして，a1 からパンクチュエイトし，出来事を実在化するかもしれない。

あるいは出来事群も以下のようにパンクチュエイトされて，人の歴史が発生する。

Ep1+(EP2+Ep3+Ep4) の出来事群を想定して見よう。（　）で区切られた内容が主体 A の生活史である。それは Ep2 を始点とすることで語られる歴史（ストーリー）となる。無論 Ep1 から構成作業を開始しないことには理由がある。それは構成された生活史に対して差異化の力になるからである。Ep1 をとりだす（パンクチュエイト）ことで出来事群を再構成することができるであろう。

11 「出来事」の一つの要素の構造と力学

図 4 より m2A→a3A を取り出してみよう。それらは以下図 6 のように図示される。

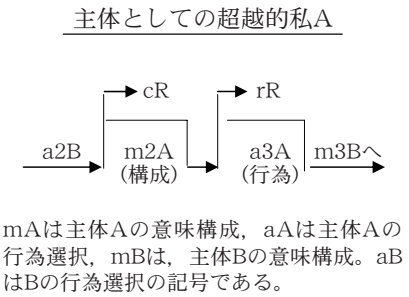


図 6　「出来事」の構成要素と要素間の力学

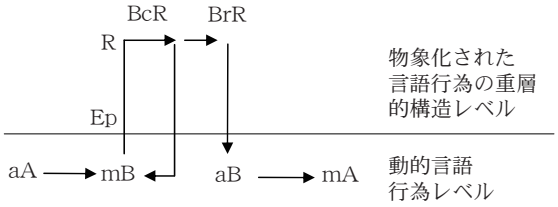


図 7　重層的現実構成

「出来事」の要素間の力学は以下のように説明される。

① B のメッセージ a2B が A に伝達される。

② a2B は A の cR に影響を及ぼす。これまでの意味構成規則で意味構成が間尺にあうならば，それは維持されるだろう。従来の構成規則で処理不可能なメッセージ入力であるならば，その構成規則は差異化され，新しく生成されるであろう。

③ 従来の，あるいは新たに生成した cR によって，A は a2B を m2A と意味づける。

④ m2A は A の行為選択規則 rR に影響を与え，rR は強化されるか，変容され，それを文脈として，B への行為 a3A が選択される。

12　重層的世界構成論

伝えられた行為の意味は受け手によって構成されることで，その意味合いが実在化する。その構成はランダムになされるのではなく，トランズアクション過程おいて産み出される特有の構成法（cR）に従うと見なされる。すなわち, 生活場面を重層的と定義した上で, 重層的構造のそれぞれのレベルが他のレベルに対して構成文脈として作用する力学より現実構成過程を説明する。つまり，それまでの出来事定義規則（DEp）や関係性定義規則（DR）つまり，cR を文脈として，伝達された行為の意味定義（Definition of meaning : Dm）が顕在化される力学より，行為レベルでの意味の発生を説明する。逆に予期しない行為（a）が伝達されたために，それを文脈として，トラズアクション過程で生じた既存の cR の内容である DEp や DR が変容するというように，制度化された規則が変化する力学を説明する（Cronen,et al）[12]。ここでは，言語行為レベルとそれが物象化，制度化された規則（cR，rR）レベル間で循環的因果関係が想定されている。つまり，ここでは，実際のトランズアクション過程においては，主体間で循環的相互作用が展開するのみならず，規則と言語行為間においても循環的過程が展開するという，二重の循環的過程という視点から，世界生成が説明される（上記図 7）。

そこでは，A の a は B に伝達され B の Ep，R 定義法（cR）を文脈としてその意味 mB が生成する。さらに，mB は BrR を経由し，aB となり，そして，mA が生成する。

Ⅲ　訴えの解法

1　私の訴えの再構成

クライアントの訴えを解決するソーシャルワーク実践の手順を述べてみよう。無秩序に肥大化した訴えを，私の訴えとして超越的私が再構成することから解決の手順が始まる。

つまり，まず肥大化した訴えを循環的記述質問法（Descriptive Circular Questions : DCQ）を用いて，主要な出来事群として（上記図 3）クライアントが記述する機会を作る。

そして，最も大変な出来事が取り上げられ，同じく循環的記述質問法により，その出来事が行為選択（a）と行為の意味構成（m）の循環的系列（上記図 6）として再構成される。

2　「出来事」を再構成する手法について

私が「出来事」（episode : Ep）構成を，体験的世界の対処不可能性の地平から，その世界の再構成の地平にシフトさせることで，あるいは差異化させることから問題の解決作業が開始する。この地平へと私の世界構成の地平をずらす，硬い表現を用いるならば，世界構成の地平のパラダイムシフトを試みる技法が DCQ である。

3　訴えの循環性

それはトランズアクション場面での主体（私）間のメッセージ伝達の力学の相互的差異生成過程，および主体（私）内での m と a，そしてそれら生成の文脈である cR と rR 間の差異生成力学の二重の相互性を意味する。（図 4 を見よ）。

4　記述について

クライアントの問題を持続させる文脈（cR と rR）の力を削ぐため，私が作り出した世界の力学として，a と m を要素とするトランズアクション過程の記述を，クライアントは求められる。この記述法は図 3 に表記されている。

5　質問法の有効性

対処不可能と体験される経験的事象（言い換えると「ヒト」化された「モノ」と「モノ」化された「人」の世界」）に対してクライアントが統制力を回復するためには，事象に対して，「私はそれをこのように考える」と私の事象として再記述し，差異を構成する作業が不可欠である（Ⅱ-2-1「私とは）を参照にせよ）。この作業は質問法の形を取る。なぜならば，質問はクライアントを構成主体に定置するからである。

6　循環的記述の質問技法 (DCQ)

これら,「循環的因果関係」を認識枠として採用した,「事態」の再記述を求める質問法とはいかなるものか。これは問題場面について，例えば「一番最初から聞いても良いですか」,「それでどうなりました」,「そのことをどう思われましたか」というように，私 A による a の 伝達と，私 B によるその意味構成 m，私 B の a 伝達という循環的系列を構成する質問法である。同時にこの技法は，人の重層的に構成された世界の力学を顕在化させる技法でもある（上記図 7，あるいは Tomm の一連の著作を見よ [13]。ただし本論においては循環的質問法を意味再構成に優位をおいた Tomm の原型の技法から，行為選択の差異化をも意図する技法に拡大している)。この技法によって，解決不可能性というフレイムを文脈とした，恣意的な時系列の範疇に縛られ，レベルが混同され結びつけられ，取捨選択され構造化された要素群（Ep，m，a)，すなわち世界構成法は，問題出来事 Ep と a と m を要素とする経験的な時系列に従いクライアントによって記述されることで，その生成力を失う。

7　DCQ と結び付けられる他の変容技法

DCQ を用い問題解決のため，行為選択と行為の意味付けを要素にして構成された出来事のシークエンスに対して一連の変容技法が用いられる。それらは以下の技法である。

①　記述されたトランズアクションへのリフレクションをクライアントに求めることで，問題維持的行為選択や意味構成の差異化を試みるリフレクシブな循環的質問法（Reflexive Circular Questions : RCQ)。

②　意識化されていない過去や現在の肯定的な問題解決的な出来事を浮上させ，現在の解決不可能性という構成の変容を目指す例外事象の探索（Exploring for the Exceptions : EE）[14] の技法。

文脈を変容させる例外事象の探索技法，あるいは未来の解決場面を想起させ，解決行動を浮上させることを目指すミラクルクエッション（Miracle Question: MQ)

③　例えば DV などと解決不能な実体として構成された問題に対して，DV という問題場面の具体的記述を求め，その困難さの順位をＣＬに問うことで，解決可能性を浮かび上がらせるスケイリング・クエッション（Scaling Quetsions: SQ)

④　そして，問題として意味づけられた出来事全体の意味合いを肯定的に組みなおし，その出来事シークエンスの要素の解決力の強化を試みる，ポジティブ・リフレイミング（Positive Reframing : PR）法 [15]。

⑤　問題行動の連鎖を処方することで，クライアントを症状コントロールの立場に立たせることを目指す，シークエンスへの逆説的介入（Paradoxical Intervention: PI）[16] による変容技法。問題行動のポジティブ・リフレイミング，リフレイムされた問題行動の処方という手順でこの介入は進行する。

8-1　各変容技法と変容の単位

これらの変容技法のなかで，RCQ は出来事シークエンスの要素を変容させる技法である。それらは，問題構成に関した対人，対未来や対過去などについての差異をクライアントに対して明らかにさせる質問群や，あるいはある考えや行動の意味を文脈に関連させて再構成する質問群である。他方 EE，MQ，PR，PI は出来事全体の意味の再構成，差異化を意図した技法である。PI 以外のこれら出来事全体の変容技法は，通常 RCQ と併用される。

8-2　差異化について

出来事がパターン化することでトランズアクションにはルールが生成する（図 6，図 7 を見よ)。支援活動において直面するのは矛盾増幅のルールである。このルールは何れも差異化を作り出す幾つかの手法で変容が試みられる。

差異つくりについて整理してみよう。RCQ，EE，MQ，PR については RCQ が要素の差異，その他は出来事全体のいずれも差異作りの技法であるが，PI は差異作りではなく，問題解決のため因果関係を逆転させ世界構成を実践させる技法である。

8-3　依拠する因果関係

PI 以外の変容技法は循環的因果関係を前提とするが，PI は結果を原因に逆転させ，変化を作り出す技法であり，他の技法とは因果論の発想が異なる。

8-4　行動変化と意味構成変化

DCQ と RCQ は，出来事の要素を形成する意味構成（m）と行為選択（a）の変容に重きを置く変容技法である。これに対して EE，MQ，PR は出来事全体の意味づけの変容とその要素の行動変容が組み合わされた変容技法であり，他方 PI も出来事全体を肯定的に意味づけ，その後行動変容を試みる変容技法であるが，行動変容が逆説的に試みられる点において，EE，MQ，PR の技法とは異なる。

8-5　文脈論

DCQ と RCQ はそれぞれのレベルが互いに文脈として他のレベルを構成すると説明する重層的世界構造論に依拠し，洗練された文脈変容方法を変容技法の中核に設定する点において，他の技法とは異なる。つまり，DCQ と RCQ は，行為やその意味付けと文脈との循環的力学の説明と変容力に優れている循環的質問技法であり（図 7)，それまでの重層的文脈論抜きの循

環的質問法（例えば，Paradox and Counter-paradox を見よ[17]）とは異なる。

8-6　変容技法と「私」

7－①～④はクライアントの「私」である超越的視点が現実の差異的構成を試みることを強化する技法である。この技法を用い，経験的世界の調和的再生産過程が円滑に進めば進むほど，クライアントの「私」は実在味を帯びる。

ところが 7－⑤は，クライアントの経験的世界で展開する悪循環が超越的「私」の現実統制力への核心を揺るがす危機的事態に対して，それまでの「私」を超越的文脈とする問題解決作業を隔離した上で，悪循環の実践をクライアントに処方し，クライアントが一挙に経験的世界の悪循環を統制する超越的実践主体，つまり「私」に復活することを目指す手法である。一挙にという意味は，この処方によって，それまでの「私」を前提とする経験的レベルでの解決作業全体が捨て去られ，クライアントは自らの吟味抜きに，問題解決を解決する主体（「私」）になる（させられる）からである。クライアントにとっては，「私はなぜか解らないけれど言われる通りにしたら問題が解決された」のである。ここでの超越的「私」は，ソーシャルワーカーの「問題実行の私になりなさい」という処方操作によって，それまでの「私」の放棄という代償を支払って作り出された「私」である。この「私」は①～④の「私」とは異なる奇妙な「私」である。なぜなら，超越は人の操作が及ばないがゆえ，超越であるのだが，ここでの超越性は操作という人為によって産出された超越性である。

さらに，この「私」は経験的レベルにおいて，解決行動を考案し産出することを禁じられているがゆえ，ソーシャルワーカーの了解困難な処方に従い解決行動を受け入れる以外，解決の術を有することができない「私」である。それゆえ，解決できた「私」は，原理的に解決行動を自ら産み出すことを禁止されている「私」であり，この「私」は問題を解決した「私」であるにもかかわらず，単独では経験的レベルでの現実構成が不可能である。

「私」はすでに論じたように，一貫した世界構成のために作り出された概念であった。他の変容技法では考察対象からは除外し，メタレベルに留めおいた「私」を，逆説処方は問題行動を受け入れ，実践する，処方の枠組み内の「私」に作り変え，それをクライアントに受け入れさせるのである。もちろんこれは価値判断を下した結論ではなく，提示したいのは，「私」が人知によって作り出された概念である以上，「私」概念は用途に従い様々に構成することが可能であるという多元論的「私」論である。

9-1　採用される技法群

問題解決のために採用される技法群を整理しておこう。

DCQ(Descriptive Circular Questions) および RCQ(Reflexive Circular Questions)

これらは出来事の要素を差異化するカルガリ学派の循環的質問法である。

EE(Exploring for the exceptions)，SQ(Scaling questions)，MQ(Miracle question).

これらは SFBP の技法である。

PR(Positive reframing)+PI(Paradoxical intervention)。

この技法は MRI の技法である。

これらはいずれも出来事全体の意味合いを変化させ，新たな解決行為を産出させる技法である。

9-2　出来事の要素の差異化モデル

先ずは出来事の要素の差異化の手順について略述して見よう。

①，問題の訴え（Complaint : C）

②，DCQ によって私は出来事群に訴えを分解する。

出来事（Episode 1 ＝ Ep1 ＋ Ep2 ＋・・・＋ Epn）

③，一つの出来事 Ep1 が取り上げられる。

④，Ep1 に対して DCQ が用いられる。

Ep1 は以下のようにソーシャルワーカーの DCQ によって a と m を要素にした時系列で私によって再記述される。

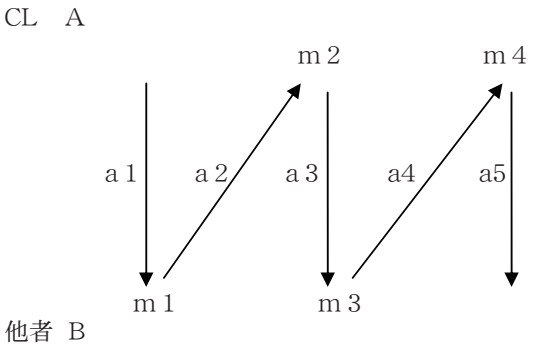


図 8　出来事シークエンス

例えば，対立が繰り返される夫婦のパターン化された出来事（Ep1+Ep2+Ep3+……Epn）を想定してみよう。Ep1 について全体的な記述が次のように展開したとしよう。

CL1　「夫は私の努力に無神経ですごく腹が立ちます」

SW1　「腹が立つ・・・・」

CL2　「自分が助けてもらっていることには鈍感です」。

SW2　「助けてもらっている・・・・。その例をあげてもらえませんか。例えば・・・・」

CL3 「例えば，食事の準備で忙しいのに，昨日の晩子どもが算数の応用問題を夫に聞きました。夫は黙って TV を見ていました。夫は算数が苦手で。私は仕方がないので，食事準備の合間を見て教えてやりました（a1)。夫は知らんふりです（a2)。そんなときありがとうのひと言があってもしかるべきです」。

次いで，以下訴えの解決を目指して，記述的循環的質問法 (DCQ) を用いて，訴えを循環的トランズアクションの時系列に組み替える作業が試みられる。

SW3 「お子さんに教えてあげたのに，ご主人は知らんふり。ひと言があってもと思われた」。

CL4 「はい。腹が立ちました」（m2)。

SW4 「立腹されたのに，我慢されて，それで‥‥」。

CL5 「言い合いになるのも嫌なので，何も言わず，教えた後食事を作りました」（a3)。

SW4 「食事をつくり・・・・。その後どうなりましたか」。

CL6 「子どもと二人だけで食べました」（a5）。

そして強く変化を意図した循環的質問法（RCQ）が試みられる。

SW4 「一言があったならどうなったでしょうか」。

CL7 「そんなことは考えられないが，本気でひと言を言ってくれたら（a)，私もいら立つことはないと思う，(a)」。

苛立たせる夫と苛立つ私（R：cR)，常同的な解決行為（a）しか選択できない自分（rR)，そして昔も，今もこれからもその繰り返しという生活場面で普遍化した予言成就的問題ストーリー(cR と rR)が，超越的「私」によって出来事を時系列の要素に組み替えられることで，問題は夫の言い方（a）として最小化，差異化される。さらに夫にこの妻の考えをリフレクションさせることで，夫は自らの行為選択（a）を差異化し，変化の力とする可能性が生まれる。

9-3　出来事差異化モデル

上記 EE と MQ は解決焦点化短期療法（SFBP）の出来事全体（Ep）を変容させる技法である。他方 PR は PI と組み合わされ，問題解消法として使用される (MRI を見よ)。PR については，PI と連動させることなく，肯定的に意味づけられた出来事の要素の肯定的意味合いを強化するべく，DCQ および RCQ と組み合わされて用いることができる。また肯定的出来事を浮上させる MQ および EE に関しても，DCQ および RCQ と併用される。

一例を挙げてみよう。この時系列の変容のため以下の様に変容技法が用いられる。

上記のシークエンスに対して，

SW3 「お子さんに教えてあげたのに，〜さん（夫）は知らんふり。ひと言があってもと思われた」に続き，

SW4 「立腹された出来事を詳しく説明していただいて，大変な事情がよくわかりました」。

お伺いしたいのですが。これまで，〜さん（夫）はあなたが子育てや家事のことで困っているときに手伝われたことはほとんどありませんでしたか」（EE)。

CL4 「全くなかったかと聞かれると。・・・・・。もちろん何回かはあります」。

SW5 「その場面をお伺いしてもよろしいでしょうか」（DCQ)。

この出来事（Ep2，あるいは 3）を CL が思い出したならば，それに対して DCQ が試みられ，出来事が要素の時系列に分解される（上記 9-2 を見よ)。そして，それらの要素の一つあるいは複数に対して RCQ が用いられ，そのことで従来の意味構成規則 cR（DEp および DR）と行為選択規則（rR）に揺らぎが生じ，さらに，解決力を有する新たな要素（a および m）が顕在化する（変容力を有する，cR と rR の萌芽の生成)。

CL5 「私が風邪を引いて調子が悪い時があって，子どもが宿題が解らないと言ってきたので，夫に「悪いけど勉強手伝ってもらえない」と頼んだことがありました。夫は「解った」と答え子どもを呼んで，勉強を手伝っていました」。

SW6 「体の調子が悪くて，〜さん（夫）に勉強を手伝うように頼まれた。その後でどうなりましたか」（DCQ)。

CL6 「算数の宿題もあったのですが，夫は苦手だといっても大卒ですし，小学校程度の算数の問題が解らないはずはありません。ちゃんと教えていたようです」。

SW7 「いつもと違う出来事が起こったようですが，何が違ったのでしょうか」（RCQ)。

CL7 「私が強く言わずに頼んだことが良かったのかもしれません」（新たな a の発生そして cR の萌芽）

SW8 「頼むだけで手伝ってもらえる‥‥」（RCQ)。

もしクライアントが頼むことの効果を同定し，クライアントが生活場面での実践について同意したならば，ソーシャルワーカーは続けて，RCQ を用いて以下の点を話しあう。夫へ子どもの宿題を頼む場面の確定，具体的な頼み方，頼むことで生じる事態のシークエンスの想起，そして夫が宿題の手伝いに同意しなかった場合への対応についてである。

続く面接において，DCQ によってクライアントはこの実践結果に対して記述が求められ，さらに RCQ によってクライアントが見出した一つの言語行為の変

容力が確認される。

9-4　出来事群構成の差異化モデル

あるいは出来事群構成を差異化する手法を提示することもできる。

Ep1 ＋ Ep2 ＋・・・＋ Epn として時系列で構成された出来事群のシークエンスに対して（図 4 を見よ），Ep1 以前の Ep0 を浮上させ，その力学と構造を差異化させることは可能である（過去の例外事象の探索：EE）。

あるいは，Ep1 から Epn の時系列内で，Ep1' を浮上させ，出来事群の結合様態を変質させることも可能である（これは例外事象の探索，EE 技法である）。

未来の解決場面を想起させ，Ep1 ＋ Ep2 ＋・・・＋ Epn の構造を解体することも可能である（これはミラクルクエッション：MQ）である。

これらの手法で出来事群の差異生成力，つまり変容力として取り出された出来事は，上記「9-3，出来事の差異化モデル」の手法でその構成要素の連鎖が具体化される（新たな a,m の生成と従来の cR と rR の変容の開始）。

さらに「9-2，出来事の要素の差異化モデル」の手法で，出来事の構成要素各々の変容力が確認される。

9-5　出来事群，出来事，出来事の要素の変容手順

1 例を示して見よう。

CL1　「これまで子どもの育て方で苦労ばかりでした（出来事群の構造化）」

SW1　「まったく苦労ばかりで，楽しみはゼロで･･･」

CL2　「もちろんまったくということは，いいすぎですが」

SW2　「そうでない場合を思い出せますか」（EE）

CL がこの場面を思い出したならば，CL1 の構造は揺らぐ（9-4「出来事群構成の差異化モデル」）。

この出来事の生起場面を取り出してそのシークエンスを列挙させ（DCQ），そのシークエンスの効果を吟味させる（RCQ）質問によって，構造を揺るがす例外事象の構造が一層明確になる（9-3，「出来事の差異化モデル」）。

そして，例外出来事の要素一つ一つを記述させ（DCQ）それら個々の変容力を再吟味させることで（RCQ）最初の出来事群の変容力として浮上した例外事象の変容力は一層強化される（9-2，「出来事の要素の差異化モデル」）。ここでは解決力を有する a と m が具現化し，cR と rR も変容が開始する。

Ⅳ　最後に

これまで国内のソーシャルワークは，問題の実在性や問題の原因論を主張しつつも，体系化された評定枠，変容技法を用いて，社会生活場面の不適応に対して関与することはまれであった。ましてや，問題の実在論や直線的因果論を乗り越え，新たな援助モデルを作る試みは，一部の実践者の集団を除いて皆無であった。国内において，論理とその実証をという思想（モダニズムの発想と呼べるかもしれない）を土台としたソーシャルワークモデル群の成熟度が低い事態で，問題の実在性や実証的な変容手法を批判的に吟味し，社会構成主義的なモデルを考案し，提示することは，多くの伝統的なソーシャルワーカーにとっては遠くまで行きすぎた，現実感が希薄な企てであり，余計なお世話であるかもしれない。しかしながら，ソーシャルワークが実践科学であることを主張するならば，ソーシャルワーカーは自らの問題解決方法を論理的に語り，その実践を具体的に提示しなければならない。その一例を本論では示した [18]。

註

1）Turner, F. J. (ed.). Social Work Treatment: Interlocking Theoretical Approaches, New York: Free Press. 1996. は最近の代表的なソーシャルワークの教科書であるが，そこでの理論及び技法はそれまでの旧版と比較して著しい進歩は見られない。

2）Oshita, Y. and Kamo, K.: Reconstructing Meaningful Life Worlds—A New Approach to Social Work Practice, New York: i Universe, 2011. In Printing.
この著作で向こう見ずにも海外に向けてソーシャルワークのパラダイムシフトの議論を試みた。

3）Pearce,W. B.: Making Social Worlds: A Communication Perspective. Oxford: Blackwell Publishing, 2007

4）ストリーと言う発想はナラティヴ・モデル，White, M and Epston, D.: Narrative Means to Therapeutic Ends. New York, W. W. Norton, 1990 で有名になった。但し，本論はナラティヴ実在論ではなく，その生成過程に焦点を合わせている。

5）Cronen ,V.E. and Pearce, W.B. : Toward an Explanation of How the Milan Method Works: An Invitation to a Systemic Epistemology and the Evolution of Family Sytems. Campbell,D and Draper, R. (eds.), Applications of Systemic Family Therapy: The Milan Approach. New York : Grune and Stratton, 1985

6）Cronen,V., Pearce, B. and Tomm, K.: A Dialectical View of Personal Change. Gergen. K. J. and Davis, K. E. (eds.), The Social Construction of the Person. New York, Springer-Verlag, 1985

7）Biestek, F. P. :The Casework Relationship. Chicago, Illinois. Loyola University Press, 1957

8）Sartre, J. P.: Nausea (P. Baldick, Trans.). Harmondsworth: Penguin, 1965

9) DCQ 及び RCQ については Cronen, V. E., Pearce, W. B. and Tomm, K. : A Dialectical View of Personal Change. Gergen, K. J and Davis, K. E. eds., The Social Construction of the Person. New York, Springer-Verlag. pp. 203-224, 1985
10) Bateson, G. : Steps to an Ecology of Mind. New York, Ballantine, 1972
11) Watzlawick, P., Bavelas, J. B. and Jackson, D.: Pragmatics of Human Communication. New York, W. W. Norton, 1967
12) Cronen, V. E. and Pearce, W. B.: Toward an Explanation of How the Milan Method Works: An Invitation to a Systemic Epistemology and the Evolution of Family Systems. Campbell, D and Draper, R. (eds.), Applications of Systemic Family Therapy: The Milan Approach. New York : Grune and Stratton. pp. 69-84, 1985
13) Tomm, K. : Circular Interviewing : A Multifaceted Clinical Tool. In D. Campbell and R. Draper (eds.), Applications of Systemic Family Therapy: The Milan Approach. New York, Grune and Stratton. pp. 33-45, 1985
Tomm, K.: Interventive Interviewing: Part Ⅱ. Reflexive questioning as a means to enable self-healing. Family Process, 26: 167-184, 1987
14) EE, MQ, SQ については，De Jong, P. and Berg, I. K.: Interviewing for Solution: Second Edition. Australia, Brooks/Cole, 2002
15) Watzlawick, P., Weakland, J. and Fisch, R.: Change: Principles of Problem Formation and Problem Resolution. New York, W. W. Norton, 1974
但しここでのポジティヴ・リフレイミングは逆説処方と組み合わされるのに対して，本論では循環的質問法と組み合わされ，その用法はオリジナルな用法とは異なる。
16) Weeks, G. R and L'Abate, L.: Paradoxical Psychotherapy: Theory and Practice with Individuals, Couples, and Families. New York, Brunner/Mazel, 1982
17) Selvini-Palazzori, M., Boscolo,L.,Ceccin, G. and Prata G.: Paradox and Counterparadox. New York, Jason Aronson, 1978
18) 最近の邦文でのこれらの理論及び技法枠での事例研究としては，
加茂陽編：被虐待児童への支援論を学ぶ人のために．京都，世界思想社，2006
大下由美：支援論の現在－保健福祉領域の視座から－．京都，世界思想社，2008
加茂陽編：ヒューマンサービス調査法を学ぶ人のために．京都，世界思想社，2009
大下由美：サポートネットワークの臨床論．京都，世界思想社，2010